

やっぱり明治が NO.1 プロジェクト

明治大学澤井ゼミナール C チーム

○桑原大河 大橋いづみ 斉藤里咲 馬場巧 松田博之 松岡駿 松岡由華

1. 緒言

近年、大学スポーツが注目を集めている。始まりは、国の政策「日本再興戦略」で大学スポーツの産業化が取り上げられたことである。2016年4月には大学スポーツの振興に関する検討会議が発足し、スポーツ振興基本計画ではアメリカをモデルに日本版 NCAA の設立と、各大学にアスレチック・デパートメントとスポーツ・アドミニストレーターの設置を促進することが明記された。その背景には大学スポーツの産業化だけでなく、そもそも大学の体育会運動部が「課外活動」であるため、次のような課題が指摘されていることがある（大学スポーツの振興に関する検討会議・最終とりまとめ、2018）。

- (1) 学業とスポーツの両立
- (2) 事故・障害の場合の責任の所在のあいまいさ
- (3) 運動部のガバナンスの問題（各部の会計の不透明性）
- (4) 監督・コーチの雇用

上記の課題を改善するため、これまで「課外活動」として活動してきた大学の運動部活動に対し、今後は大学がより主体的に経営に関わらせようということが現在進行している大学スポーツ改革の流れである。

しかし、日本とアメリカでは大学スポーツを取り巻く状況は異なる。アメリカは NCAA という専門の機関が大学スポーツ全体を統括しており、ほとんどの大学にアスレチックデパートメントがある。日本は現時点でそうしたスポーツ専門の部局を置いている大学はほとんどない。大学がわざわざ組織改編し、スポーツに新たに投資するためには、大学におけるスポーツの存在感や意義がもっと大学に理解される必要がある。教育機関である大学にとっては学生のニーズは重要だと考える。そこで、本研究では、「明治大学の学生のスポーツへの関心を高めるためには何が必要か」について考えたいと思う。

2. 調査と結果

(1) インタビュー調査

【調査方法】

明治大学の現状を知るために、スポーツ振興事務室にインタビュー調査を行った。スポーツ振興事務室は学生支援部の下で明治大学の体育会運動部を統括している部署である。

- 調査対象：明治大学スポーツ振興事務室職員 2 名（男性 1 名、女性 1 名。ともに明治大学出身）
- 調査日時：2018 年 9 月 20 日

- 調査項目：業務内容、NCAA へ向けた学内の動き、学業支援、監督との雇用関係等

【結果】

明治大学は体育会運動部を「正課外教育」つまり単位認定はされる正課教育ではないが、学校の教育活動の一環として支援していく活動と位置づけている。しかし実際に行っていることは施設の管理、補助金の分配等だけであり、練習時間や各部のスポンサーなど、部の詳細な経営情報は把握していないということだった。

その中で、スポーツ振興事務室が今後最優先に取り組むべきものとして 1. 学業との両立 2. スポーツに取り組む学生の安全・安心 3. 一般学生のスポーツへの興味・関心を向上させる、の三つを挙げていた。自身も明治大学出身である職員のお二人によれば、「最近の明治大学の学生はスポーツを見に行かなくなった。」ということだった。やはりスポーツ振興事務室でも学生の大学スポーツに対する関心の低下が問題と捉えられていた。

一般学生のスポーツへの興味・関心があるかどうかの指標として大学スポーツの試合を実際に見に行くことが挙げられるが、多くの学生は試合を見に訪れていないのが現状である。その原因を考えるためにスポーツ観戦の動機と観戦の阻害要因について検討した。

(2) 大学スポーツ観戦動機に関する検討

仲澤ら(2014)によると、Jリーグ観戦者の動機因子はドラマ性(試合が接戦で緊迫し最後まで決着が分からない際に味わう緊張感に対して個人が示す興味)、競技の審美性(選手の華麗なパフォーマンスや芸術的なプレイに対する個人的関心)、地域への愛着(Jリーグクラブがホームタウンの知名度を向上させることに対して個人が示す関心)、選手への愛着(特定の選手に対する興味・関心によって観戦が動機づけられる)、サッカー(競技)への愛着(応援や観戦等の行動が主にサッカーへの関心によって引き起こされる)、クラブへの愛着(個人がクラブに対して形成するサポーターとしての心理的つながり※最も観戦行動への影響力が強い)が重要であるという。

また、林(2017)によると、母校を代表するスポーツチームにアイデンティティを感じ、試合を観戦、応援することで、大学への帰属意識つまり愛校心が育まれるという。つまり大学スポーツでは「愛校心」が重要なファクターになると考えられる。

これらの理論を明治大学に当てはめると、「ドラマ性」、「審美性」は運動部の競技力に依存するが、大学は教育機関であり学業との両立を考慮すれば競技力への投資は極めて限られる。また、明治大学の体育会部活動は46部あることや、大学は「競技団体」ではないため「競技への愛着」を促進するというのは難しいと思われる。「地域への愛着」についても、明治大学は全国から学生が集まり、キャンパスも千代田区、杉並区、中野区、川崎市に分散していることから集まりにくいと思われる。残るのは「選手への愛着」と「クラブへの愛着」と「愛校心」である。つまり、「選手への愛着」と「各チームへの愛着」と「大学への愛校

心」の三つが明治大学生の大学スポーツの関心を高める上で重要な要素であると考えられる。

(3) アンケート結果にみる観戦阻害要因

【調査方法】

運動部の試合の観戦に関するアンケート調査を行った。明治大学学生の大学スポーツ観戦の観戦阻害要因に着目し、大学スポーツを観戦に行くことの観戦を妨げている原因を明らかにすることを目的とした。

- 調査対象：明治大学の学生
- 調査項目：明治大学体育会運動部の試合観戦経験、観戦へ行かない理由
- 有効回答部数：88部

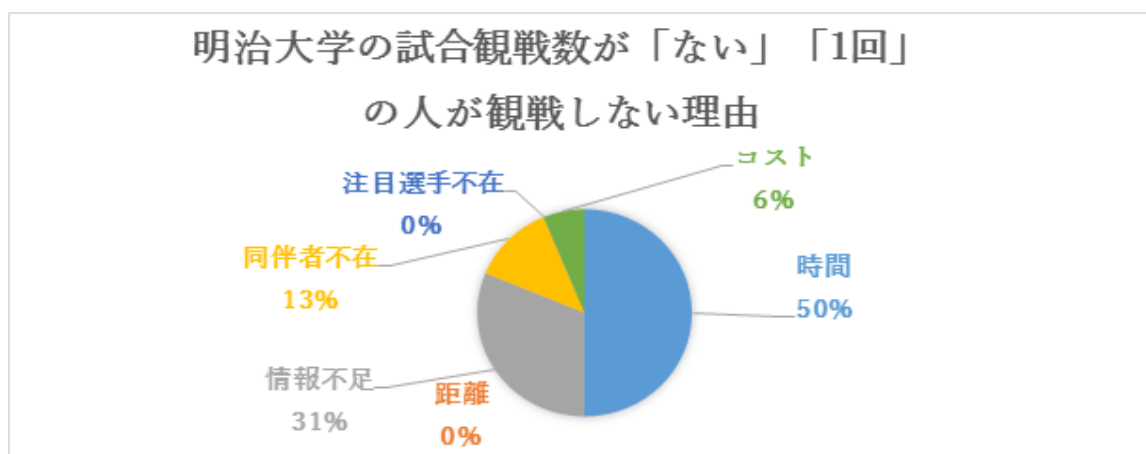


図 1. 観戦へ行かない理由

【結果】

明治大学生において、観戦阻害要因として「時間」が最も高く、続いて「情報不足」、
「同伴者不在」、「コスト」の順に高いことが分かった。また、「あなたが明治大学運動部の
試合を見に行かない理由は何か」という質問のコメントで、「時間がない」「興味がない」と
答えた学生が 53% だった。「時間がない」というのは他の選択肢と比べて観戦に行くことの
優先順位が低いことを表しているため、「興味がない」ことを示唆する。以上のことから、
明治大学生の観戦阻害要因として大きく二つに分けることができると考えた。一つ目はス
ポーツ観戦に興味がなく、観戦意図が低い学生、二つ目は観戦意図が高いものの、「情報不
足」等の観戦阻害要因によって観戦に行けない学生、である。すなわち観戦意図は高いが観
戦行動に結びつかない学生にいかにかアプローチするかということと、観戦意図が低い学生
に興味・関心を持ってもらうためのアプローチ、の 2 つの対応策を検討し、以下のような提
言を考えた。

3. 考察・提言

アンケートの結果と、チーム内でのディスカッションを行い、「やっぱり明治がNO.1プロジェクト」として以下のような提言を行う。

「やっぱり明治がNO.1プロジェクト」

(1) 提言の内容「Meiji University Sports Association (明治大学スポーツ組織)」

明治大学の学生の大学スポーツの関心を高めるため、つまり、学生自身がやっぱり明治がNO.1 だと思わせるような企画・運営をする学生団体を作る。スポーツ振興事務室と連携して行う。

(2) 組織体制

明治大学の公認学生団体に所属する。類似団体としてはM-Navi 学生委員会が挙げられる。M-Navi 学生委員会は明治大学の学生支援プログラムを運営する、大学が公式に支援する学生組織で、さまざまな文化的なプログラムを学生に提供している。私たちが提案する学生団体は大学スポーツ振興を専門とし、大学スポーツを活性化させることを目的とし、スポーツ振興事務室が公式に支援する。

(3) 期待される効果

学生が中心となって活動する公認学生団体が明治大学を内部から盛り上げることで学生自身のニーズを的確に捉えられることが期待される。学生団体、サークルとして応援することが重要で、単なるスポーツ観戦ではなく、スポーツ観戦を学生同士の交流の場として発展させていくことも期待できるかもしれない。そうして試合会場での一体感をより感じてもらい、試合観戦以外の付加価値を生み出す。この付加価値により一般学生が会場に何度も足を運ぶようになり、自身の大学への愛好心が高まることが期待される。明治大学内のスポーツ活性化、つまり体育会運動部の試合観客数が増加するすれば、大学内の大学スポーツの存在意義がより高まるものと考えられ、大学スポーツの環境改善が図られることが期待される。

参考文献

- 林直也「大学への帰属意識に影響を及ぼす要因に関する研究」Human welfare : HW 9(1), 179-192, 2017-03
- 仲澤 眞, 吉田 政幸, 岩村 聡「Jリーグ観戦者の動機因子：Jリーグの導入期における二次的データの検証」スポーツマネジメント研究 2014年6巻1号 P17～35